

# 地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

## CONTENTS

■新理事長に磯野昌子さん	1,2
■2019年度地球の木はこのように活動しています	3
■from ネパール	4
■from ラオス	5
■「共に生きる」って?	6
■もったいないキャンペーン報告	7
■地球の木と私	7
■活動日誌	7
■インフォメーション	8
■編集後記	8

いその よしこ

## 新理事長に磯野昌子さん

新しい取り組みを模索しながら地球の木の活動を進めていた堀千鶴理事長が、2018年度をもって退任されました。そしてそのバトンは理事であった磯野昌子さんに引き継がれました。



### マザーテレサの「生き方」に共鳴

「ボランティアは仲間がいてこそ活動が生まれる。そしてやりたいことをやる。それが原点だと思います」。信条にブレがない。

母親であり、学校講師、そして市民活動家の顔を持つ。この「一人三役」の道を歩み続けて20年近くになる。初めに国際ボランティアに興味を持ったのは、来日を機に知ったマザーテレサ。インドで誰からも必要とされずに死のうとしている貧しい人々に寄り添う彼女の「生き方」に共鳴した。多感な中学、高校生の頃である。

この共鳴感はその後の人生進路に昇華し、大学生の時からインドやネパールに行くようになり、大学院での修士論文は現地調査を重ねた「ネパールの森林破壊の現状と社会林業（住民参加による共有林管理）」をテーマにした。「思えば学生の頃から、住民が自分たちで自分たちの地域をよくする、ということにこだわってきたように思います」。奇しくも、その姿勢は今の地球の木の支援活動のあり方につながっている。

卒業後は教育開発と開発教育の研究機関に籍を置き、主に

ネパールの識字教育に関する調査研究や、国内では「世界がもし100人の村だったら」の教材開発など、理論と実践に腐心した。しかし、少子化の波を受けて大学附置の研究所が閉鎖し、自身は子育てに専念しようと神奈川県逗子市に転居。この逗子市において8年前に始めたのが、本人が自ら「市民活動家」と称する所以ともなった「フェアトレードタウン」の認証活動。志を同じくする仲間数人と勉強会や市議会請願など関連機関に東奔西走する努力が実り、2016年、全国3番目の認定都市になった。

今回の新たな肩書に、家族の反応は「黙認してくれているようです」と、苦笑い。「私を家に引き留めておくのは無理だと諦めているのでしょ」と屈託ない。「天命」を知ると言われる「知命」を迎えただけの50歳である。

(会報作成チーム 野崎俊一)

### 座談形式でインタビューしました

地球の木は1991年に発足し、その後、特定非営利活動法人を取得。2年後には30周年を迎えます。新理事長には累積する課題への取り組みや今後の活動の在り方について座談形式で伺ったものを一問一答の形でまとめました。

#### —— 最初の出会いやいきさつは。

約20年前のことですが、当時、地球の木の理事長の横川芳江さんが開発教育の会合の席で活動の「食卓に募金箱を置く話」(\*)を聞いたのが最初の出会いでした。[生活者]の立場から世界のことを考え、開発教育のことに取り組んでいる団体だというイメージを持っていました。

# 「皆さんから学び、支えられながらやっていきたい」

——国際協力のきっかけは、中学時代まで遡ると聞いていますが。

中学生の時にマザーテレサが来日し、彼女の生き方に感銘を受け、将来は世界の貧しい人のために貢献したいと思ったのがこの道に入るきっかけです。その後、インドやネパールを始め、さまざまな国にボランティア活動に行きましたが、「援助の難しさ」やその限界を感じました。そして自分にできることは自分が見たことや学んだことを日本で伝えることだと思いました。それを開発教育というのだと知り、大学3年の時に開発教育の門を叩きました。教師になろうと思い、高校の非常勤講師を5年間勤めましたが、教育現場では十分に開発教育ができないことや、もっと海外の現場に関わりたいという思いもあって、開発教育と教育開発の研究をしている研究所に就職しました。

——フェアトレードについてもお話しください。

研究所ではネパールの教育研究をしていましたが、1996年にネパールのフェアトレード生産者に関する調査に誘われてから関心を持ち、翌年には英国の調査もしました。研究所を退職してからは離れていましたが、2011年に地元の逗子市でフェアトレードタウンの活動を始めてから再び本格的に関わることになりました。

——1番目の質問と一部重複しますが、理事を4年間経験され、今回は皆さんに推されて理事長を引き受けられました。その間に地球の木の活動として何か気が付かれたことや気になったことなどはありましたか。

当時の理事長や理事の皆さんをはじめ、地球の木には素敵な生き方をしている先輩がいらっしやうと思いました。有償スタッフではなくボランティアがこれほど本格的に海外の事業を担っている組織は珍しいと思います。それは誰もが海外協力に関われるという敷居の低さという魅力にも繋がっていると思います。ただ一方では、組織としての持続性を考えると、有償スタッフが国内事業だけでなく、海外事業に関する業務も担うべきだと思っています。

——地球の木は、今、色々な課題を抱えています。例えば直面する一つが発足時当初からの主力である会員の高齢化と減少。また、活動費やコアとなる人材の確保、海外の支援先の再検討などがあります。それらの対策はどうしますか。

高齢化については体力を考えてみんなができるボランティアの形を考えていく必要があると思います。リタイアされたシニア層の活躍も視野にあります。

支援先の再検討という点については、現在行っている支援



地球の木の今後を話し合うコア会で

が活動開始当初のビジョンを達成したのかを確認することが大事だと思います。達成したと言えるのであれば、新しい支援先を検討するか、もしくは高齢化や財源縮小の流れの中で、従来とは異なる組織の形を考えていく必要もあると思っています。

——活動資金の確保についてはどんな対応を考えられていますか。

会員が減少すると共に会費収入が目減りし、海外事業は助成金に頼っている状況です。助成金は必ず確保できるわけではないので、支援先に迷惑をかけないためにも自己財源を増やしていく必要があります。自己財源の一つとしてクラフトの売り上げがありますが、現在は在庫を抱え赤字部門となっています。一方で、生活クラブ生協と福祉クラブ生協の共同購入にて始めた「もったいないキャンペーン」の寄付は大きな収入源です。そうした事業全体の見直しが必要かと思っています。

——理事会を構成する理事の人数も減り、組織形態も変更になったと聞いていますが。

理事はこれまでの11人から8人に減りました。メンバーの顔ぶれは生活クラブ生協の地域活動をされていた方々をはじめ、元教諭、地方公務員OBらキャリアはバラエティに富んでいます。理事長としては自分ができないことは正直にヘルプを求めて、皆さんから学びながら支えられながらやっていきたいと思っています。

(会報作成チーム)

(\*)地球の木の会費基準となる考え方。1ヵ月でランチ代として一食500円の節約をすれば年間6,000円となる運動を提唱した。

# 地球の木はこのように活動しています

2019年度

地球の木



**石北正道 (国内活動)**

地球の木の支援が現地に適合し継続性を重視した活動に向かうことを期待しております。活動が積分から微分になりそうなベクトルに危惧しています。もう一度原点に戻り組織・支援の在り方を再考したいと思います。



**斎藤聖 (国内活動)**

横浜NGOネットワーク (YNN) 理事長を退任したと思ったら、地球の木の理事に「再任用」されました(笑)。地球の木とは、横浜市立平楽中学校で国際学習を始めた2000年以来的おつきあい。よろしくお願ひいたします。



**成瀬悦子 (海外支援、国内活動)**

会費と温かい励ましの言葉で応援して下さる皆さま。どんな方が応援して下さっているのでしょうか。今年は皆さまと顔の見える関係をつくりたいと思います。これだったら行くわ!!というイベントがあれば事務所まで。アイデアを待っています。



**大嶋朝香 (副理事長)**

理事長を補佐し、とにかく議論を前に。これからの地球の木について、国際交流について、考え、話し、実践が活性化するような運営をしたいと思います。口はひかえて、腹はたてずに。



## 理事から ひとこと

**中野真理子 (海外支援)**

4年前に理事会を卒業したはずの戻り中野です。地球の木30周年を2年後に控え、地球の木はどのような方向を目指すのか。皆さんと共に取り組んでいく所存です。微力ですが、無力ではないと信じてがんばります。



**堀千鶴 (海外支援)**

支援地の地元の方々と現地NPO、そして地球の木の活動をご理解いただきご協力をして下さる皆さんとの関係を繋ぐ役割を果たせるよう、理事をつとめられれば良いと考えます。また皆さんにご意見をいただき活動に活かしていきたいです。



**廣瀬康代 (海外支援)**

“地球の木とは”を考えながらの活動だと思っています。目の前の問題を何とかしつつ、海外支援団体「地球の木」として広く世界を見ながら考えていきたいと思っています。



# ベリラマさん～水が流れる豊かな村を作った女性～

1月の調査でピンタリ村を初めて訪問しました。村人たちは、水路を流れる豊かな水で葉やニンニクの泥を落とし出荷の準備をしていました。豊かな農作物、安定した生活が、穏やかな表情にあらわれていました。しかし、この幸せな生活は、強い意志を持った、ある女性の行動がなかったらありえなかったのです。

以下は、SAGUN のカマルさん、サルバジットさん共著の論文の中から翻訳しました。

(ネパールチーム 勝田文隆)

女性の名前はベリラマさん。1926年生まれ。兄から読み書きを教わり、ネパール語を話せるまでになりましたが、結婚を強いられ、22歳でピンタリ村に嫁がされました。ピンタリ村に来てびっくりしたのは、水場が全くないこと。女性たちは、山の中にある湧き水か断崖の下の川に降り、2時間かかる水汲みを一日に何回もしていました。農作物は雨水頼み。水不足で何頭もの水牛が死に、作物で生計を立てるのも困難な状況でした。ベリラマさんは、嫁いだその日からこの村のために何かしなくてはと決意します。こんなに大きな問題があるのに、なぜ男たちは誰も何もしないのか？それは、「水汲み」という重労働を担っていたのは女性たちで、男たちは水汲みの苦勞を知らなかったからです。

ベリラマさんは1955年ピンタリから2キロ離れた水源から水を引くというアイデアを思いつきました。水源は急峻な丘に位置し、とても困難な計画に思いましたが、彼女は諦めませんでした。身内の、村の実力者2人を何回も説得し、全面的な協力を得ることができました。村人の協力がなければこの事業は成功しないと気付いていたのです。多くの村人がこの計画に賛同し、工事のためのお金が集められましたが、村人の募金だけでは全く足りません。ベリラマさんは貴金属など私財を売り払い、実母に頼んでお金を借り、資金を捻出。村人の信頼を勝ち取りました。村の外から来て、工事を手伝ってくれた人は、ネパール語を使っていました。ネパール語をまともに話せるのはベリラマさんしかいなかったため、彼女はなくてはならない存在になりました。

しかし、このことが村の権力者の怒りを買い、彼女の仕事を妨害をしようといろいろとやります。「私は夢の中で神様から少年を生贄に出しなさい、というお告げをもらった」とか「蛇の神様が夢に出てきてこの仕事を止めなさい、とお告げをもらった」とか。しかし、彼女はひるまず仕事を続けました。専門技術者はいませんが、ベリラマさんは地形を調査し、作業を指揮しました。急峻な丘にハンマーを手に持ち、大



きな岩を削り掘るベリラマさんの姿が見られました。結局11人の人々と多くの村人を巻き込んでおおよそ1年かけてこの水路を完成することが出来ました。

ベリラマさんは「水路を通して水が勢いよく流れ込んで、村人が喜び、お祝いしてくれた日のことを今もよく覚えているよ。もし村に水が引かれたら鼻を切り落とすと言っていた年配の隣人は私に謝罪して、盛大な宗教祝事を取りおこなってくれたよ。それ以上何を望もうか」と語りました。それでも、彼女の成功を愉かに思わぬ男たちがいて、ベリラマさんはピンタリ村を離れ平野部へ居を移すことになりました。今、多くの村人は、心無い男たちがベリラマさんを村から追い出したことを残念に思い、そのことは村にとって大きな損失だと感じています。

彼女は水路の工事以外に道路の地図を作ったり、効果的に水を管理する「水管理組合」を立ち上げたりしました。その後、海外からの技術的、財政的援助を受けて小型水力発電設備が完成。村人は食料と水に困らない電気のある、幸せな生活を手にすることができました。ピンタリ村の女性たちは、ベリラマさんを誇りに思い、「女性は強い信念と献身があれば何でもできる」ことを学んだと言います。



# ラオスの村人と森との関係について ～興味深い話から～



提供:日本国際ボランティアセンター(JVC)

ラオスを語るとき、森は欠かせない。「アジアの最貧国でも飢えて死ぬ人がいないのは、豊かな森があるから」、「約7割が農民で、天水田、焼き畑でコメをつくり、日々の食材、薬、建材などを森から調達しており、森はスーパーマーケットの役割を果たす」と紹介してきた。先般、「ラオス文化研究会」主催の会合で、国際農林水産業研究センター(JIRCAS) (\*)のK氏から「ラオスの森からとれるもの」という講演を聞く機会があり、村人と森との関係が具体的に分かり、興味深かったのでここに紹介する。

## —— 驚くべき森の持つ経済価値 ——

講師のK氏によると、2012年にビエンチャン県のN村で全140世帯に依頼して、毎日森から採取してきたものをその種類、キ口数、自家用か販売目的か等について1年間記録してもらった。その結果、彼らの森と共にある暮らしが数値として表れ、森の存在の重要性が明らかになった。

この村では、食料としてのキノコやタケノコ、山菜類の他、様々な薬草類を採集し、フタバガキ科の樹木からは油(樹脂)を採り、灯りに使ってきた。竹やラタン、ホウキ草等で手作りした日用品は、貴重な現金収入源となる。動物系では、現地では高級食材の竹虫や蟻の卵、カメ、蛇、オオトカゲ、リス、カエル等は貴重なたんぱく源だ。

実にこの村だけでも、1年間で約300種類の植物系、124種類の動物系非木材林産物を村人は日常的に採取し、さらにそのほとんどが自家消費されるということが分かった。販売用はそのうち1割程度だろう。

これを貨幣に換算すると(有効回答104世帯)、この村全体では年間560万円程度、一世帯当たり約5万円/年の換算となり、この他薪の調達も含むと森の持つ経済価値はさらに高まるそうだ。(参考:公務員の月給約2万円)

しばしば洪水や干ばつに襲われ、作物生産が不安定な村人の暮らしに多種多様な林産物の恵みは、どれほど大きなセーフティネットとなっているか、その実態が浮かび上がってきた。これが「最貧国でも飢餓はない」と言われるゆえんなのだろう。

## —— 近年の森は伐採等で劣化 ——

しかし、5年後の調査(2017年)ではやはり近年森が荒れてきており、明らかに村人が森から得ている植物系、動物系食料は減っていたという結果だった。

森の劣化原因としてラオス全体で言えるのは、森が伐採され、パラゴム(車や航空機のタイヤの原料)やらユーカリ(紙の原料)、北部地方では中国向けのバナナなどの単一換金作物のプランテーションに急激に変わってしまったこと。さらにいうと、村人の森離れがあるとのこと。村人がバイヤーに高く売れるものを大量に採って売るなどして、天然資源が荒らされて森の多様性が失われつつある。

また経済成長率7%のラオスでは、今までの森に依存するお金を使わない暮らしから、手っ取り早く現金収入を求めて若者が工場で働いたり、隣国タイへ出稼ぎに行くようになっており、村に若者の姿が見かけられなくなってきている。森に行けば必要なものは何でもあり、お金を必要としなかった暮らしから、お金がなければ暮らせない暮らしになってしまった。経済成長を目指せば、どこでもこういうプロセスをたどるのは必然なのだろうか。

## —— 「日本の里山暮らし」ヒントに ——

K氏は、自然資源を採りつくすことによる森の劣化を食い止め、再び魅力ある森とするには、村人の手によって自分たちの森の価値を高め、そこからの現金収入の手段につながることを考えなくてはならないと言う。日本の里山暮らしをヒントにラオス人の好むキノコの原木栽培を提案したいと講演で述べていた。ラオスの村の暮らしは、つい4、50年前までであった日本の里山を彷彿とさせる。自然の恵みをうまく利用する里山の暮らしは、今また、生物多様性の保存と持続可能な生活のヒントとして世界でも見直されてきている。経済発展の陰で消えてしまいそうなラオスの伝統的暮らしを、里山という視点から見直して、私たち自身の未来の暮らしのヒントとすることができるのではないかと考えている。(ラオスチーム 中野真理子)

\*国際農林水産業研究センター:農林水産省所管の国立開発法人。開発途上地域における農林水産業に関する技術向上のための試験研究を行っている。

# 「共に生きる」って？

## 「あーすフェスタかながわ」から見えるもの

### まつりとフォーラム

毎年5月、本郷台駅近くの地球市民かながわプラザで国際色豊かな祭りが開かれます。館内へと通じる通路は各国の民芸品を売るバザールが賑わい、世界屋台村は人でぎっしり。建物の中へ入ると、ステージでは華やかな世界の踊り、各部屋では珍しい楽器や踊りのワークショップ、子どもたちで溢れる世界の遊び場、ギャラリーには展示のほか、各国の楽器や民族衣装が並びます。

見たところ、どこにでもある国際フェスティバル。しかし中身はちょっと違います。このまつりの名前は「あーすフェスタかながわ」。今年20回目を開催しました。民族団体、外国人コミュニティ、NGO、地元の町内会に加え、神奈川県が実行委員に参加し、事務局を務めていることも大きな特徴です。

企画・運営に携わる企画委員には外国につながる人たちが多く参加しています。6カ月にわたる長い期間、討議をしながら「共に作り、共に考える」イベントであることがとても重要なポイントなのです。テーマは「みんなで育てる多文化共生」。

あーすフェスタのメインイベントのひとつにフォーラムがあります。一般市民が課題を知り、外国籍の人たちと知り合い、話し合うことができる場です。外国人＝西洋の人ではなく、神奈川県に住む多様な外国につながる人たちと語り合う大切な場所。このような機会が年1回ではなく、もっと多くあるべきだという意見がたくさん出ています。

### 神奈川県の国際外交

神奈川県の取り組みを振り返ってみましょう。時代は1970年代に遡ります。1975年から1995年の間、在任した長洲神奈川知事は、国同士の外交政策に対し、「国際外交」を唱えました。平和を担う人々を育てるには、人と人、地域と地域が交流をして互いを理解する必要があるという考えから、県の政



あーすフェスタのフォーラムの様子

策に取り入れていきました。神奈川そのものを国際社会にするためには、その一員として外国籍県民も権利が守られ、生き生きと活躍できなくてはならないと述べています。国際交流課を立ち上げただけでなく、県庁全体で国際外交に取り組む流れを作りました。国際交流協会ができたのもこの頃です。

1980年代には、在日外国人、特に韓国・朝鮮の県民について実態調査をしました。1988年には「ともに(ハムケ)一見る、知る、考える。在日韓国・朝鮮人と私たち」というパンフレットを刊行しました。その意図を記した文章の最後の部分を引用しましょう。

様々な国の人々とノ心を開いてつきあっていく。これはとても素敵なことだと思う。ノでも、そのためには最も身近な隣人、在日韓国・朝鮮人のことをノもっと知らなくては。そう思わないか。ノそのためには、まず彼らが何を思い、どう生きているのかを知ること、ノそこが出発点となるはずだ。

この内なる国際外交の流れを受け継いだ岡崎知事の時代に、外国籍かながわ県民会議やあーすフェスタが始まりました。

### これから

現在、神奈川県には21万人以上の外国人が暮らしています。その出身国・地域は174カ国にも及びます。外国人登録者が多い県としては、東京・愛知・大阪に次ぎ4位です。今年入管法が改正され、労働力として多くの外国人を受け入れていくこととなります。同じ市民として外国人とどのように「共に」生きていくかは私たち一人ひとりが考え、実行していかなくてはならないことです。共にいることで互いを知り、助け合うことができる。平和の芽はそんなところから育つと心から思います。

(ネパールチーム 丸谷士都子)



フィナーレで踊り手が全員集合

# 「もったいないキャンペーン」

## ありがとうございます



6月22日(土)、事務所近くに場所を借り、キャンペーンで集まった品々の仕分け作業が行われました。今年もたくさんの方々から、主にハガキや切手、商品券など数多くの品が集まりました。ご協力に感謝いたします。

今回の仕分け作業には、企業による社会貢献活動を後押しするフィランソロピー協会の仲介で、昨年地球の木のネパールプログラムに寄付金をいただいた銀行のグループの2社から3名の女性社員が都内や千葉から参加してくれました。普段から社会貢献のボランティア活動に参加しているとのこと。『海外支援をしているNGOの実際の活動やお話を聞くのは初めてなので楽しみにしていました』とその中のお一人。

地球の木からは8名が参加。ネパール支援の紹介のあと、最初は数え間違わないよう真剣に、でも慣れてくるとおしゃべりも交わしながら昼食を挟んで5時間近く、和気あいあいと作業をしました。3名はさすが現役社員！効率の良い働きに私

ちも引っ張られて波に乗り、予定以上の作業を完了することができました。  
(会報作成チーム 沼田由美子)



今回は会員の皆様のご参加をお待ちしています



## 地球の木が いつもヒントをくれる

18年前北海道で過ごした大学時代。全国から集まった風変りな学生が多く、夜な夜な「生きるとは」「命とは」、そんな話ばかりをしていた。酪農を学ぶ場であり、またアイヌや野生動物、農業…“命”を間近に感じる環境がそこにはあった。そんな中、ゼミ活動で訪れたカンボジア。現地の人々の優しさや精神的な豊かさに心を揺さぶられ、自分の価値観が大きく変わる鮮明な体験となった。

大学卒業後、学びを深めたいとNPOの職を探す中で地球の木との巡り合わせがあり、まだ右も左も分からない私を事務局員として雇って頂いた。その2年間は素晴らしい出会いに満ちた時間であり、海外支援を通して、日本の私たちの生き方に投げかける問いに、多くを考えさせられた貴重な時間となった。

その後、地球の木の活動に関わっていないが、昨年の夏、現在勤めている横浜市泉区の障害者の方の通所施設・喫茶店で開催した『小学生「夏休みの課題」応援企画！ネパールわくわくワークショップ』にファシリテーターとして乳井さん、丸谷さんに来て頂く機会を得た。参加してくれた小学生の子どもたち、そして施設で働く利用者さん、施設職員。ネパールを通してみんな笑顔・笑顔・笑顔。温かな時間を皆で共有した素敵なひとときだった。地球の木の活動が人をつなぎ、包み込んでくれる。改めて地球の木に所属していることに喜びを感じた。

現在は3児の母、育児に追われる日々だが、「生きるとは」「命とは」の問いは常に持ち続けていたいと思っている。活動にはほぼ関わっておらず、申し訳ない気持ちで一杯だが、地球の木がいつもヒントをくれる、そんな思いで会報を読ませて頂いている。  
(横浜市旭区 竹村理佐)

## 活動日誌(6月～8月抜粋)

### 6月

- 2日 ふくしまつり
- 3日 第1回理事会
- 8日 出前講座(鎌倉女学院高校)
- 11・12日 デポー展示会(鎌倉)
- 15日 デポー展示会(東戸塚)
- 19日 第2回理事会
- 22日 もったいないキャンペーン仕分け会
- 23日 ネパールスタディツアー報告会

### 7月

- 6日 出前講座(町田市立真光寺中学校)
- 10・11日 デポー展示会(ほんもく)
- 12日 地球の木勉強会
- 17日 第3回理事会

### 8月

- 5・6日 デポー展示会(つなしま)
- 7日 地球の木第1回コア会
- 8日 地球の木カフェ(鎌倉)



## 2020年版 「地球の木」カレンダーができました！



・カレンダータイトル:

「トウム・テ・バロバロ～幸せの音が響く島～」



・写真家: 竹沢うるま氏

・サイズ

壁掛け: 32cm×38.5cm

(使用時 60cm×38.5cm)

卓上: 16cm×17.8cm×7.5cm

・制作元:

日本国際ボランティアセンター  
(JVC)

・価格

壁掛け: 1,600円(税込)

卓上: 1,300円(税込)

### イベント情報

#### ●かながわ市民活動フェア

2019年9月28日(土)、29日(日) 10:00～17:00

(2日目は15時まで)

場所: かながわ県民活動サポートセンター  
活動紹介、クラフト販売で参加

#### ●よこはま国際フェスタ2019

2019年10月12日(土) 10:30～16:00

場所: グランモール公園(みなとみらい)  
活動紹介、クラフト販売で参加

#### ●なか区民活動センター祭り

2019年10月13日(日) 10:00～16:00

場所: なか区民活動センター  
ワークショップ「ちょっぴり体験! ラオスの村の暮らし」で参加

#### ●かながわ湊フェスタ2019

2019年11月3日(日) 10:00～15:30

場所: 神奈川公会堂  
ワークショップ「ちょっぴり体験! ラオスの村の暮らし」、クラフト販売で参加

#### ●かまくら国際交流フェスティバル2019

2019年11月10日(日) 10:00～16:00

場所: 鎌倉高德院(鎌倉大仏)  
活動紹介、クラフト販売、コーヒー販売で参加

#### ●オルタ館フェスタ

2019年11月16日(土) 10:00～15:30

場所: オルタナティブ生活館  
活動紹介、クラフト・カレンダー販売で参加

#### ●ひらつか市民活動センターまつり

2019年11月24日(土) 10:00～15:30

場所: ひらつか市民活動センター(崇善公民館)  
活動紹介、クラフト販売で参加

#### ●東日本大震災・復興支援まつり2019 in みなとみらい

2019年12月7日(土) 10:00～14:30

場所: 横浜臨港パーク  
活動紹介、クラフト販売で参加



### デポ一展示会

10月22日(火)、23日(水)	霧が丘
10月31日(木)、11月1日(金)	市ヶ尾
11月 7日(木)	相武台
12月 5日(木)	つなしま
12月12日(木)、13日(金)	つつじが丘

### 訂正

前回の会報1ページの『甘いバナナと苦い現実』の記事の中で、地球の木はネグロス島のバナナ農園の支援をしていたとしましたが誤りでした。実際は、サトウキビ農園の労働者たちへの支援でした。文中「バナナの支援を始めたきっかけは」を「バナナについて関心を持ったきっかけは」に訂正いたします。(会報作成チーム)



特定非営利活動法人  
**地球の木**



何かとストレスの多い世の中。そのはげ口の  
一つが日記を綴ること。この習癖は50数年にも  
なる。たまった大学ノートは数十冊。「生きた証」  
と、1人悦に入っている。が、ゴミ化を怖れる家人  
は「断捨離、ダンシャリよ」とせき立てる。当欄にもデビューした喜寿  
オトコのつぶやきでした。いや雑譚かな。どうぞご教示。(の)